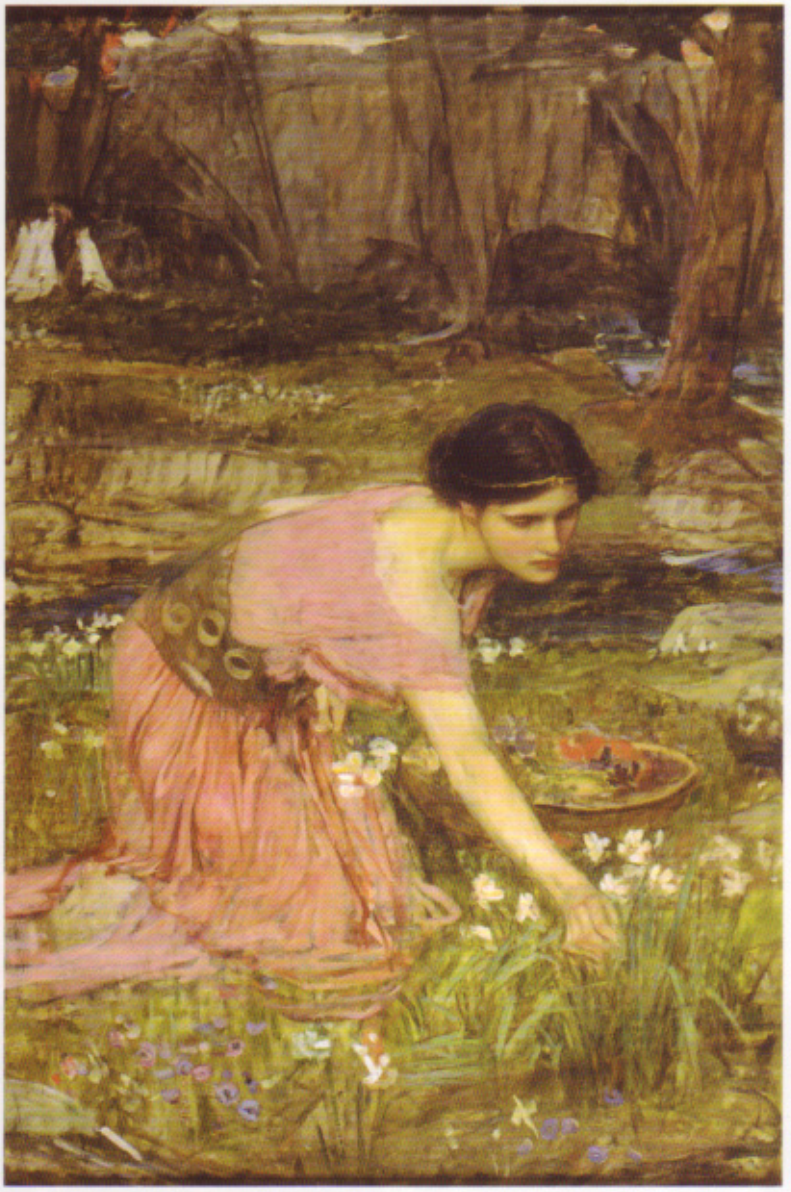
ISSN 0918-1385

THE ROOF

郡山市立美術館ニュース ザ・ルーフ 2009.10.20 Vol.35

「フローラ」は、ローマ神話に登場する花と春と豊穣を司る女神です。常春を表わすフローラは古くから人々に愛され、芸術作品のテーマやモティーフなどに繰り返し取り上げられてきました。西風の神ゼフュロスと結ばれたフローラから、たくさんの花が生まれたと伝えられています。

この作品では、フローラが森の中で春先に咲く花々を摘んでいます。いま、彼女が手にしているのが芳しい水仙の花、ほかにもアネモネらしき赤や紫色の花がみてとれます。背景に描かれている川は、雪解け水を抱いて流れを増しているのでしょう。木立や草花、そしてフローラが纏うドレスにもご注目ください。弾むような勢いのある筆致が画面に動きをもたらし、フローラを主役とした春の息吹をいきいきと表わしています。こうした筆のタッチを生かす描き方は、印象派や20世紀絵画に通じる新しい表現方法でした。



上
ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス
〈フローラ〉
油彩・キャンバス
102.5×69.4cm
1868～84年

下
サー・エドワード・コーリー・バーン＝ジョーンズ
〈フローラ〉
油彩・キャンバス
95.5×64.9cm
いずれも当館蔵

作者のウォーターハウス（1849～1917）は、イギリスのヴィクトリア朝に活躍した画家です。イギリスの近代美術のコレクションを有する当館では、もう一点、バーン＝ジョーンズ（1833～1898）による同名の油彩画を所蔵しています。先輩的な存在であったバーン＝ジョーンズの影響を受けて、ウォーターハウスは1880年代から神話や文学をテーマにした作品を手がけるようになりました。同じく〈フローラ〉をテーマにしながら、バーン＝ジョーンズは神殿を舞台に花の種をまく姿にあらわしました。余情をみせない女神の表情と落ち着いた色調があいまって、静謐な雰囲気を印象づけています。一方、ウォーターハウスはドラマ性を感じさせる場面を色彩豊かに描きました。素描力に裏打ちされた身体の表現も、画面の臨場感をいっそう高めています。飽きながら一心に花を摘むフローラ。うつむき加減の表情は、どんな心のあらわれでしょうか。ナルキッソスに報われない恋をしたエコーのごとく深い哀しみ…それとも、頬を染めて春の訪れに胸を踊らせているのかもしれません。様々な想像をかきたてる、魅惑の作品です。

（当館学芸員　永山　多貴子）

休 館 日：毎週月曜日休館
（11月23日は開館、翌日休館）
開館時間：午前9時30分～午後5時まで
（最終入館は午後4時30分まで）
会　　場：郡山市立美術館企画展示室
主　　催：郡山市立美術館
後　　援：ロシア連邦大使館、
ロシア国際文化科学協力センター
協　　力：日本航空
企画協力：アートインプレッション
観 覧 料：一般1,000(800)円
高・大学生500(400)円
※（　）内は20名以上の団体料金。中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料。

イワン・クラムスコイ〈忘れえぬ女〉1883年 ©The State Tretyakov Gallery

ニコライ・カサトキン〈恋のライバル〉1890年
©The State Tretyakov Gallery

Unforgettable RUSSIA

国立トレチャコフ美術館展
Masterpieces from The State Tretyakov Gallery
忘れえぬロシア　2009 10月24日sat-12月13日sun

日本とロシア。このふたつの国を結ぶものとは何でしょうか？

まずあげられるのは、ロシア民謡でしょう。テレビが普及する前の日本において、若者たちは歌声喫茶で、「一週間」、「トロイカ」、「カチューシャ」、「ポーリュシカ・ポーレ」、「ヴォルガの舟歌」、「灯」、「カリンカ」といったロシア民謡を皆で歌って楽しんでいたのでした（最近では、民謡ではありませんが、「百万本のバラ」がヒットしたことは記憶に新しいところです）。

この展覧会は、まさにその歌声喫茶の時代に日本で歌われてきたロシア民謡が聞こえてくるような作品でいっぱいです。おそらく、歌声喫茶で楽しんでいた方々にとっては、今回の展覧会に出品されているレーピンやクラムスコイといった画家の名前はなじみがあるかもしれません。覚えやすいメロディに、明るくてもどこかに物悲しさをたたえたロシア民謡と同じように、彼らの作品には我慢強さ、厳しさ、といったロシア人の精神性といったものが表現されていると思われます。

出品作は十九世紀中ごろから二十世紀初頭にかけてのもので、すべてモスクワの国立トレチャコフ美術館の所蔵品です。そこは、主にロシア美術を収蔵・展示する美術館で、その創始者であるロシアの実業家、パーヴェル・トレチャコフ（1832～1898）とその弟セルゲイ・トレチャコフ（1834～1892）とが熱心に収集したものです。注目すべきは、彼らは、自分たちが生きている間に活躍していた画家たちの作品を主に収集した、ということです。ですから、直接画家から購入したものや、画家に注文をして（時には修正まで求めて！）描いてもらったものも含まれています。セルゲイの死後、作品はモスクワ市に寄贈され、モスクワ市立美術館となり、ロシア革命の翌年である1918年に、作品は市から国（ソビエト連邦）へ管轄が移り、現在の国立トレチャコフ美術館となりました。

兄パーヴェルは風景画を好みましたので、四季折々のロシアの風景を私たちは見ることができます。時代はフランスの印象派勃興期。当然その影響を受けた画家たちもいますが、彼らは明るい色彩を用いながらも、明確に形をとらえてロシアの広大な自然を描いています。フランスよりも日中の時間が短いロシアに住む画家たちにとって、太陽の光がどれほど貴重なものであったのかを物語っているようでもあります。

ニコライ・ゲー〈文豪トルストイの肖像〉1884年
©The State Tretyakov Gallery

コンスタンチン・ユーオン〈三月の太陽〉1915年
©The State Tretyakov Gallery

イラリオン・プリャニシニコフ〈空っぽの荷車〉1872年
©The State Tretyakov Gallery

また、交友関係も広かったパーヴェルは、レーピンやクラムスコイに肖像画を描くよう依頼もしました。それらの作品は、いずれも偉ぶったりすましたりした、いわゆる肖像画然としたものではなく、むしろスナップ写真のような親しみやすいものになっています。中でもツルゲーネフ、トルストイ、チェーホフらの肖像画は、祖国の誇るべき同胞として描かれています。恐らく、トレチャコフ自身の注文によるものなのでしょうが、同時代ならではの空気をそこに感じとることができます。それはまた、ロシアにおける肖像画の発展においてたいへん意義のあることでもありました。

最近、日本はロシア・ブームだといわれています。先に紹介した歌声喫茶は、最近復活の兆しを見せているようです。そして何よりも、亀山郁夫氏によって新しく翻訳されたドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」や「罪と罰」がここ2、3年に相次いで出版され、ベストセラーを記録しているという事実があります。ドストエフスキーも、実は今回の展覧会出品作が描かれた時代の作家なのです。これほどドストエフスキーが注目されているのは、今の日本の社会状況に、彼の生きた時代のロシアが重なっているからなのでしょうか。今展で、特に印象深いのは、ロシア、という国を画家たちが常に意識し、それを画面に塗りこめていることです。ロシア人としての自分を見失わないこと、それは、私たち日本人が日本人としての自分を見失わないことを思い出させてくれます。ドストエフスキーの小説は、あるいは現代の私たちに警笛を鳴らしているのかもしれません。

さあ、「罪と罰」の主人公、ラスコーリニコフの苦悩を思い出しつつ、おなじみの「灯」などを心の中で歌いながら、展示室へようこそ…。

（当館学芸員　菅野　洋人）

イリヤ・レーピン
〈レーピン夫人と子供たち「あぜ道にて」〉
1879年
©The State Tretyakov Gallery

講演会

「革命か、神か—ドストエフスキー『罪と罰』の時代とグローバル社会」

講師：亀山郁夫氏
（東京外国語大学長、ロシア文学者）

日　時：10月31日（土）午後2時から
場　所：美術館多目的スタジオ
※入場無料

イリヤ・オストロウーホフ〈黄金の秋〉1886年
©The State Tretyakov Gallery

フョードル・ワシーリエフ〈漁師〉1870年
©The State Tretyakov Gallery

アートの交差展を、ふりかえる。

この夏、郡山市立美術館で開催された「アートの交差展」。出品作家のみなさんと観客の方に、ひと夏をふりかえってもらいました。

今泉　裕紗
（国際アート&デザイン専門学校　講師）

今年の夏、また素敵な出会いがありました。大学の先輩でもあり、大好きな作家である青山ひろゆきさんをはじめとする新進アーティストの参加したこの企画展は、新しい風を吹き込んでくれました。

美術館に入り、まず待ち構えていたのは、前後に動く並んだ熊3体と回り続けるクロコダイル。一体これは何なのか。胸は高鳴る一方でした。郷愁漂う色鮮やかなキャンディーとおちゃめな天使から始まり、巨大アスパラやサラリーマンのマネをする猿、電球の光、動いては止まる動物。そして最後に辿り着いたのは、普段は感じることができない音の世界でした。

情報化、記号化してしまった現代では、私達の日常は止まることなく、作り続ける理由よりも、やめてしまう口実の方が遥かに多いけれど、作品を介することで築ける関係がある、ということが、私にとっての喜びであり、意味のあることだと思っている。

活動を続けていれば、また、いつか、どこかで再びつながったり、出会ったりする。その楽しみがアートの「交差点」にはある。つくり手と、鑑賞者とが、性別、年齢、関係なく、道は続き、つながっている。

願わくば、また、「アートの交差展」で交わった人々と、どこかの交差点で出会えたら、と思っている。

―追記。　展覧会が終わった今でも、朝の天気予報では郡山の天気、気温が気にかかる。「今日の郡山の天気は晴れ。最高気温25度。東京とは3度差だ。そう、確認をして、本日の制作にとりかかる。実家である宮城へ帰省する際に通過する街のひとつでしかなかった郡山と、私の新しい関係だ。旅と同じように、気にかかる場所が増えるのは、心楽しい。

青山　ひろゆき　AOYAMA Hiroyuki

今回の展覧会は、作家としてだけではなく鑑賞者としても素晴らしい展覧会でした。一つのテーマをもとにした現代美術の展覧会は、これまでいくつも見てきましたが、中でも今回の展示内容は、現代美術を知る上で密度が濃く充実していて良かったように思います。テーマだけでなく、作家そして学芸員が同世代で統一されていたためか、異種多様な表現手段による作家の集まりにも関わらず、そのニュアンスがぶれることなく鑑賞者が最初から最後まで気楽に楽しめることができたのではないでしょうか。少なくとも私はそう感じました。

私の展示室は、平面でありながらも空間をインスタレーションしたいという考えから、作品を普段よりもかなりハイポジションで展示してみました。通常平面作品とは、人間の目線よりも若干低めに展示することで、首も疲れず落ち着いて鑑賞できるようにしてあるものです。しかし、今回ハイポジションに展示したのは、作品一つ一つの鑑賞と同時に、鑑賞者の視線を上げることで視野が広がりパノラマ上に展示空間を楽しんでいただきという意図がありました。そして、フロアの中心に椅子を配置することで、その効果はよりましました。椅子に座って鑑賞された方は、より効果的に体感することが出来たのではないでしょうか。また、壁面ごとにメリハリをつける工夫もしました。ラムネで統一された壁面、ピンクの背景、穏やかな色調、そして制作年などです。

最後になりますが私は、今回の展示で唯一の福島県出身者です。これまでは、東京などの都市部が主な発表場所で、なかなか地方で展示する機会に恵まれませんでした。それは、私の作品の方向性が、現代美術であったためかもしれません。地方で今回のような現代美術の展覧会を開催したことは、画期的であるのと同時に、とてもうれしいことでありました。今後も様々な場所で皆様に見ていただけるよう頑張ってまいりたいと思います。

北村　奈津子　KITAMURA Natsuko

今となって、振り返ってみても、なぜ、郡山市立美術館で展示させていただけたのか、不思議である。いつかは、美術館で展示できたら…。と夢のように思っていたのだけど。

―死期が近いのかもしれない―と思った。自分が美術館に展示できるのは、晩年か、死後だと、信じていたからだ。

アートの「交差点」というものがあったとして、おそらく、私は、その交差点を通りかかり、運よく、交わることができたのであろう。

「アートの交差展」では、本当に多くの方と関わることができた。美術館関係者の方々然り、出品作家の方、来場いただいた方々。

例え、たまたま、であったとしても、私や、私の作品と関わって下さる、見て下さる、その時間を、いただいているのだから、本当に有難いことだ。

私のやっていることはあまりにも、ささやかで、意味など無いに等しく、作り続ける理由よりも、やめてしまう口実の方が遥かに多いけれど、作品を介することで築ける関係がある、ということが、私にとっての喜びであり、意味のあることだと思っている。

なく揺れ動き、時間に追われてしまいがちです。しかし、少し足を止めて世界を見ると、そこには儚くも無限の時間が存在していることに気づかされます。音の振動に身を委ねること、鶏の真相について考えること、そして熊が前後に動くこと。それらの作品一つ一つが私の心に語りかけるのです。

作品を眺めているうちに、自分が時空を操っているような、過去と未来と現在を自由に行き来しているような感覚になりました。そこに存在していたものは普遍的で絶対的であると同時に、流動的で瞬間的なものでした。

そして、青山さんの「スタンプ・刷る大壁画を作ろう!—天使のいる場所—」へ参加もこの展示をより深いものにしてくれた気がします。それは床一面の大きな布に参加者が好きな色で大きなスタンプを押し、その上に各々が描いた天使を刷っていくというワークショップでした。アートという交差点で初めて会う者同士が一つの物を作り上げると言う事。そこでは大人も子供も無く、無垢な天使のごとく自由に絵の中を飛び回ることができるのです。

この企画展は、胎内のような温かく緩やかな心の鼓動を感じさせてくれ、無我夢中で遊んでいた子供の頃の記憶を思い出させてくれました。ここで出会った「時間を自由に操れる天使」の心を大切にしていきたいと思います。

タムラ サトル TAMURA Satoru

2009年は、郡山市立美術館から始まり、市原市水と彫刻の丘(千葉)・鶴岡アートフォーラム(山形)・栃木県立美術館(栃木)・プラザノース(埼玉)と、毎週どこかで展示設営があったりワークショップが開催されるような忙しい夏でした。

そのなかでも、郡山市立美術館での「アートの交差展」の展示・ワークショップは、いままでの私のキャリアのなかで最大規模のものだったので、より強烈に記憶されています。特に、12年前の作品"回転するワニ"を出展できたことは、感慨深いものでした。カタログでのスピンクロコダイルの制作年は1997年ですが、実質的には大学3年(1994年)の「電気を使った芸術装置」という課題で制作した作品なのです。

全体的な展示に関して言えば、いくつか課題が見つかりました。私の作品は大きくて動くものが多く、それゆえ展示する方法・場所が自ずから決まってきてしまうのですが、だからこそ位置の微調節やライティング・作品同士のコンビネーションなどを、再考する時間をより多くとるべきであったと反省しています。また、もともと、いわゆるホワイトキューブよりも、なにかしら特異な場所での展示(霊廟、ホワイエなど)が多く、その空間にある邪魔なもの(梁、柱、窓)を起点にして作品をインストールする癖があるのです。そういう意味で、美術館展示室の空間は、私にとって若干やっかいであることにも気付きました。とはいうものの、倉庫がほぼ空になるくらいの4トントラック3台分の作品がこうして一堂に会した展示は、実に壮観でした。富岡さんをはじめ郡山市立美術館の皆様にお礼申し上げます。

2009年の夏は旅の一座のように各地を巡りましたが、来年の今頃は何をしているのでしょう。いろいろな意味で、ぎりぎりのところで作家活動をしているので、いつも自問自答しています。作家やってるかな。いや、やってると思うよ。

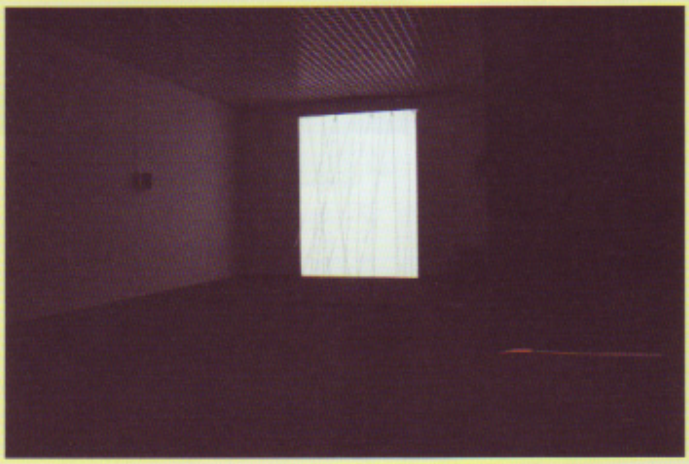
野口 久美子 NOGUCHI Kumiko

今回、初めての企画展への出品、また新作も含め2作品とコラボレーション作品の展示をさせて頂きました。

今まで、フェスティバルなどの展示が多く、美術館での展示が初めてだったため、いろいろと戸惑う事が多く、いろんな方にご協力頂きながら、作品を展示することができました。

・3年ぶりの新作(インスタレーション)発表

私の作品は、場所や機材などの設備が必要なため簡単に展示することが難しく、またインスタレーション作品の実績も少ないにも関わらず、新作の依頼を頂きとても嬉しく制作に入りました。



・コラボレーション作品

初のコラボレーション作品となった「氷の計測」、2t近くある氷の固まりが溶ける様子を観測するという試み、この企画をキュレーターの方々にお話したとき、正直採用されないだろうと思っていました。しかし、一声目に「おもしろそう!」という言葉を頂き、実現することとなりました。

このように初めての試みを積極的に受け入れて頂いたことは私にとって、自信や今後の制作へのモチベーションを維持させる大きなものとなりました。また、この企画展では、手法の違う作家が集まった展示だったため、鑑賞者に○○アートというような先入観を植え付ける事無く、「アート」という大きな枠を見る事ができたのではないかと思います。

今後も様々な作品や作家が交差するような展覧会が増えて行く事を期待しつつ、私自信も作品制作の足を止めず続けて行くことを強く思っています。

ようこそ楽都へ ～ 有元利夫と「天空の女神」たち

郡山市は、戦後復興の機運のなか、市民による音楽活動をもとにした映画が撮られるほど全国の注目をあつめ、その延長上で、安積黎明高校合唱部などアマチュア団体の全国規模のコンクールでの毎年のような上位入賞、そして作曲家の湯浅譲二さん、指揮者の本名徹次さんなどのプロの音楽家の国際的な活躍によって「音楽都市」の地位を確固たるものとしてきました。そうそう、かつては歌謡曲の故・市川昭介さん、近年ではGReeeeNと、大衆音楽の世界のほうも忘れてはいけません。

GReeeeNはともかく、この「楽都」という言葉は、これまでの歴史的な背景を踏まえ、郡山市の都市イメージのキーワードとして創られた言葉です。その《楽都郡山》へ、「ロマネスクな異色新人」として話題を呼び、独特な女性像で知られる有元利夫（1946～1985）の作品がやってきます。その有元の作品には音楽を感じさせるテーマの女性像がたくさんあります。

有元が本格的な制作活動を行ったのは20歳代の終わりころから没年までの約10年です。このたった10年のあいだに、有元は370点あまりのタブローと多くの版画や素描を創り続けました。ヨーロッパのフレスコ画や日本の仏画の肌合いにインスピレーションを得たという独特の画風は、今日も多くの美術ファンの心をとらえています。

「ロンド」　1982(昭和57)年
三番町小川美術館所蔵　©Yoko Arimoto

クラシカルなタッチで描かれた現代風の女性たちの多くは、それぞれが歌い奏で、あるいは舞っています。「音楽」は有元の作品にとって不可欠な要素のひとつなのです。

有元は10代のころ、伝説の武道館公演を二回も聴きに行ったほどの「ビートルズ命」だったのですが、やがて優雅で格調高いバロック音楽へひかれるようになります。お気に入りは、というとヴァイオリン協奏曲「四季」（とくに「春」）があまりにも有名なヴィヴァルディ。あのマンネリ感がたまらない、と有元は言っています。

また、バロックに興味を持ち始めたころの音楽の鑑賞法がちょっと変わっています。ホールでの生演奏を聴く以外だったら、好きなミュージシャンのレコード（現代ならCD）をプレーヤーにかけて聴くのが普通でしょうが、有元は声楽を専攻する友人に勧められ、レコードではなくてスコア（楽譜）を買ってきて、リコーダーで「自分で演奏して聴く」というやり方で音楽を鑑賞したのです。どんな名コンダクターや名オーケストラの演奏よりも、自分自身の目で音符を読み、自分自身の口で、手で演奏したほうが楽しいんでしょうね。自らやってみて学習する、今はやりの体験学習の元祖みたいな人です。

こうして身についていった音楽は、やがてビジュアル的に再現され、再構築されて1枚の絵となって皆さんの前に登場します。今度は皆さんが有元の作品を鑑賞し、《楽都 郡山》に舞い降りた「天空の女神」たちの奏でる音楽を感じ取ってください。

（当館学芸員　鈴木 誠一）

「花降る日」　1977(昭和52)年
三番町小川美術館所蔵　©Yoko Arimoto

没後25周年　有元利夫展
― 天空の音楽 ―

2010(平成22)年
1月30日(土)～3月22日(月・祝)

開館時間：午前9時30分から午後5時まで
（入館は午後4時30分まで）
休 館 日：毎週月曜日（ただし3月22日は開館）
主　　催：郡山市立美術館
協　　力：産経新聞社／三番町小川美術館
企画協力：イデア・ジャポン
観 覧 料：一般800(640)円　高校・大学生500(400)円
（　　）内は20名以上の団体料金
中学生以下、65歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料

「フーガ」　1976(昭和51)年
三番町小川美術館所蔵　©Yoko Arimoto

Report

夏休み期間の美術館では、企画展「アートの交差展」開催に合わせて、様々な行事が開催されました。
また、郡山市内の小学生の作品による「風土記の丘の美術展」も今年で8回目を迎えました。

先生のためのワークショップ「風景スケッチ ～視点をかえて～」

日　時：7月29日(水)
講　師：青山ひろゆきさん

ワークショップ「100gをつくる」

日　時：7月26日(日)
講　師：タムラサトルさん

アーティスト・トーク

クマが動く仕組みなど、制作の背景やコンセプトについて知ることができました。

日　時：7月25日(土)
講　師：タムラサトルさん

「第8回 風土記の丘の美術展」

日　時：7月20日(月)～8月23日(日)

アーティスト・トーク

天使が画面に登場した経緯や制作方法など作家ならではの話しを聞くことができました。

日　時：8月8日(土)
講　師：青山ひろゆきさん

庭をつかった作品展示

美術館の庭に設置された氷が溶けていく様子を様々な方法で観察しました。

日　時：8月2日(日)
講　師：野口久美子さん

ワークショップ「図工&美術の時間へ ようこそ!」

日　時：8月1日(土)・8日(土)
講　師：郡山市内の小・中学校の先生

アーティスト・トーク

音と映像が生み出す世界について、来館者と対話をしながら理解を深めました。

日　時：8月1日(土)
講　師：野口久美子さん

ミュージアム・コンサート

ふくしまFMとの共催で行われました。

日　時：8月29日(土)
出　演：吉田慶子さん(ヴォーカル・ギター)

親子で楽しむ ギャラリートーク

日　時：8月22日(土)・23日(日)
講　師：当館学芸員

公開制作

新作のバナナ作品の制作を通して、アートが生まれる現場を来館者に見ていただきました。

日　時：8月15日(土)・16日(日)
講　師：北村奈津子さん

ワークショップ「スタンプ・刷る大壁画を作ろう!ー天使のいる場所ー」

日　時：8月9日(日)
講　師：青山ひろゆきさん

INFORMATION

常設展示のごあんない

■10月15日(木)～12月27日(日)まで

展示室1　文学と寓意
展示室2　亀井至一と竹二郎
展示室3　小特集：ケネス・アーミテイジ
展示室4　版で発信する作家たち
　　ドレッサーとジャポニスム

常設展示風景

■1月19日(火)～

展示室1　人物を描く
展示室2　明治の魂
展示室3　色彩と形の詩情
展示室4　20世紀イギリス版画
　　暮らしの中の工芸

広瀬孝次〈田園景色〉
明治23(1890)年　油彩・キャンバス

イベント

ミュージアム・シアター

11月8日(日)午後2時から
「戦艦ポチョムキン」
セルゲイ・エイゼンシュテイン監督　1925年

11月23日(月・祝)午後2時から
「僕の村は戦場だった」
アンドレイ・タルコフスキー監督　1962年
場　所：美術館多目的スタジオ
定　員：150名　入場無料

ミュージアム・コンサート

「ロシアの心」
演奏者：岸本 力(バス歌手)、毛塚 功一(ギター)
日　時：11月14日(土)午後6時～

※事前申し込みが必要です。往復はがきの往信裏面に住所・氏名・電話番号・希望人数(一通につき3名様まで)を明記し、返信表面にご自身の郵便番号・住所・氏名を明記の上、「郡山市立美術館　演奏会」宛までお送りください。10月31日〆切(当日消印有効)。申し込み人数が200名を超えた場合は抽選となります。結果は返信はがきにてお知らせします。

申し込み先：963－0666
福島県郡山市安原町字大谷地130－2
郡山市立美術館　演奏会宛

TOPICS

○全館休館のお知らせ

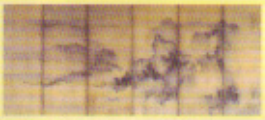
12月28日(月)～2010年1月18日(月)

年末年始及び館内の消毒のため、全館休館となります。

○雪村周継「四季山水図屏風」特別展示

12月19日(土)～2010年1月24日(日)
(休館日をのぞく)

場所：企画展示室
常設展のチケットでご覧いただけます。
一般210(150)円、高・大生130(100)円
(　)内は20名以上の団体料金　中学生以下の方、65歳以上の方、障がい者手帳をお持ちの方は無料



雪村周継〈四季山水図屏風〉
16世紀後半　紙本墨画
六曲一双屏風

Cafe Flora　カフェ フローラ

美術館の自然が一望できるカフェで、くつろぎのひとときをお過ごしください。

【メニュー】
チキンカレー……890円
オリエンタルカリー……950円
バーガーサンド……780円
(ドリンクセット+300円)
各種デザート、飲物
営業時間：11:00～18:30
(企画展開催時は10:30～)
毎週月曜定休
024－942－2212

ミュージアムショップより

ミュージアムグッズとして定番になった感のあるクリアファイル。皆さんの机の引き出しにもありませんか?郡山市立美術館でも、友の会作成の所蔵品をモチーフにしたオリジナルのクリアファイルを販売しています。
【クリアファイル各種　300円】

郡山市立美術館
Koriyama City Museum of Art
〒963-0666 福島県郡山市安原町字大谷地130-2
TEL:024-956-2200　FAX:024-956-2350
郡山市立美術館ホームページ　http://www.city.koriyama.fukushima.jp/bijyutukan/

ミックス品
このパンフレットは、環境にやさしい大豆油インキとFSC認証紙を使用しています。紙へリサイクル可。